〈研究ノート〉

相対的剥奪論　再訪（四）*

高　坂　健　次**

はじめに

これまで３回にわたって、主に *The American Soldier*（1949）を中心に「相対的剥奪」概念の草創期における性質を振り返ってきた（高坂、2009、2010a、2010b）。主な論点の一つとしては、「相対的剥奪」が集団的特性としてとらえられていた、という点にある。このことをスタウファーたちによるオリジナルデータを整理してグラフ化することによって確認した。「集団的特性」としてとらえられていたということは、ある集団ないし集合体（たとえば、低学歴の憲兵隊）の成員の意見（たとえば、軍の昇進機会についての評価）について「平均して」みると、他の集団ないし集合体に比べて客観的に不遇な状態にあればあるほど「満足度」が高いというパラドックスが観察されるということを意味していた。

すなわち、ここではその集団ないし集合体の個々の成員がどのようなメカニズムを経て「相対的剥奪」に至るのかの解明までは実はできていなかったのである。ミクロ－マクロ連携の必要性が叫ばれ、所謂「コールマン・ボート」も私たちにとってはほぼ自明の課題視されている今日にあっては（Coleman、1990）、「集団的特性」の指摘にとどまっていたのでは議論は完結しないということは誰しも思いつく課題ではないかとさえ考えられるけれども、*The American Soldier* の段階、さらにはその直後の数年間はそうした点は課題視されなかったように思う。

「課題視されなかった」と断言することには慎重でなければならないかもしれないが、本稿ではあらためてマートンやラザーズフェルドを中心に、*The American Soldier* の仕事、とくに「相対的剥奪論」の側面についての仕事がどのように受け止められていたかについて振り返っておきたい[1)]。

1　マートンとキットの寄与と３つの「取り逃がした機会」

1.1　概念定義の問題

こんにち多くの社会学徒にとって「相対的剥奪論」と言えば、まずマートンの『社会理論と社会構造』という著作（の改訂版）のなかの「準拠集団行動の理論」という一章を思い浮かべることだろう（Merton、1957）。この章は、旧稿（高坂、2010a の注１）でも触れたとおり、Alice S. Kitt (Alice S. Rossi の旧姓）との協働で執筆された論文であり、原題は「準拠集団行動理論へのいくつかの提言」（Contributions to the Theory of Reference Group Behavior）であった（Merton and Kitt, 1950）。「協働」の中身までは詳らかでないけれども、本稿においてこの論文に言及するかぎりはあえてマートンとキットの二人を一組の著者として表しておきたい。

マートンとキットは、スタウファーたちの本には「相対的剥奪」のフォーマルな定義がない、といくぶん批判的な含みをもたせて言う(Merton and Kitt, 1950：43)。たしかに、スタウファーたちは「相対的剥奪」概念を明示的かつ意識的に用い、相対的剥奪理論こそは「さもないとバラバラ

*キーワード：相対的剥奪、『アメリカ軍兵士』、準拠集団、取り逃がした機会
本研究の一部は、科学研究費基盤研究(B)（課題番号：20330114）の援助を受けてなされたものである。
**関西学院大学社会学部教授

の経験的発見をより一般的なかたちで整序するのに役立つ」といくぶん誇らしげに述べてはいるものの（Stouffer, 1949：52）、どこを探しても定義らしきものは見当たらない。

ちなみに、マートンの本の邦訳では「定義がない」という箇所は、「…正式の概念規定がない…」とか「…相対的不満の概念について正式の規定が欠けている…」となっていて、すでに「定義」という表現と考え方に慣れたものにとっては「概念規定」はまだしも「規定」という単独の表現は馴染みにくく、ともすれば読み飛ばしてしまいかねない。

では、マートンとキットが、「フォーマルな定義」が欠けていることを心底から批判しているかというとそうでもなくて、それが欠けていることは「けっして大きなハンディキャップではない」とむしろ弁護的である。すなわち：

> …社会学理論における確固たる伝統ではむしろ使われないままに終わっている夥しい数の概念定義が満ち溢れているのに対して、スタウファーたちはその伝統に束縛されていない。私たちは概念の明確な定義を下す代わりに、その本のそこかしこに散らばっているすべての該当事例を整理してみて、一見相互に関係がないと見えるような状況であっても、スタウファーたちがその概念を使っている状況を取り上げることができる。そうすることで、私たちはその概念が現実には操作的な性格をもっていることを少しでも学べばいいのである（Merton and Kitt：1950：43）。

この直後に、マートンとキットは *The American Soldier* の著作のなかから「相対的剥奪」概念ないしそれに近い概念（たとえば、「相対的地位」）が用いられていると思しき９つの抜粋を列挙しているのである。９つのエピソードはいずれも「比較」という行為が媒介して剥奪感を生んでいる状況に関するものであり、*The American Soldier* を読まないものにとってもはその内容を知りうる格好のリストとなっている。

かくて、マートンとキットは、「相対的剥奪」概念が幅広く援用できる概念であり、また社会学的説明に不可欠な概念であることを読者に伝えることで相対的剥奪論に大きく寄与する第一歩を踏み出したと言ってよい。しかし、彼らもまた「フォーマルな概念定義」を与えるという折角の「機会を取り逃がして」しまったのである。

ちなみに、「相対的剥奪」概念が操作的性格（operational character）をもっている、という表現や指摘は適切ではない。なぜなら、「操作的（定義）」とは一定のマニュアルのような指示があって、誰であっても（すなわち、素人であれ玄人であれ、経験が浅かろうが豊かであろうが関係なく、マニュアル自体を理解するものであれば）一定の明確なトコロ（状況）に辿り着けることを意味するからだ。誰もが間違うことのない「道案内」のような事柄をイメージとして思い浮かべればよい。

マートンとキットも９つの抜粋から「相対的剥奪」の「操作的定義」を下そうと思えばできたはずだと思われるけれど、何故かそれをしなかったのである。こうした事例の列挙は私たちの想像力を刺激してくれるとはいえ、概念定義を欠いたままやれることには自ずと限界がある[2)]。

1.2　準拠集団論

マートンとキットが *The American Soldier*、とくにそのなかの「相対的剥奪」論を取り上げたのは、「準拠集団」論の文脈においてであった。したがって、彼らにとっての重要度からすれば「準拠集団」のほうが「相対的剥奪」よりも上位だったかも知れない。じじつ、「相対的剥奪」なき「準拠集団」論はありうるけれども、「準拠集団」

1）たとえば、中国（社会学）においては中産階級の性質があらためて議論され（周暁紅・謝曙光　主編『中国研究』「本期焦点・・社会分層与中国中産階級」No. 7-8、2008、社会科学文献出版社）、なかでも中産階級が「社会安定器」かどうかのいわば「論争」が若い世代の研究者から仕掛けられている（張翼「中産階級是社会穏定器嗎？」李春玲　主編『比較視野下的中産階級形成』社会科学文献出版社、2009；李春玲「尋求変革還是安於現状？」（近刊、印刷中））。私は「相対的剥奪論」こそがこの「論争」を解く大きな鍵を握っていると考えており、すでにその「解決私案」もあるけれども、それについては別稿に譲りたい。

2）私なりの「中範囲の理論」批判としては、たとえば、髙坂（2006）を参照されたい。

なき「相対的剥奪」論はありえないように思う。すなわち、私たちは自らの行動や他者の評価に関してつねに「準拠集団」を想定して行っているけれども、その結果が「相対的剥奪」に必ずしも関係しているとは限らない。しかし、「相対的剥奪」は意識的か無意識的か、明示的か否かは別として必ず「準拠集団」の存在を伴っている。

マートンとキットは、先の９つの抜粋を吟味することで、人々がどのような準拠枠を用いているかの整理に辿り着いている。大きくは、準拠枠が自分と同じ所属集団つまりはその意味においての「内集団」であるか、「外集団」であるかの軸と、比較の対象としている相手の地位が自分の地位と同じかどうかの軸との二つによって９つの抜粋を整理している。ここでは紙幅の制約上彼らが辿り着いた整理のための図表（Merton and Kitt, 1950：48）は、マートンの著作でも簡単に見ることができるし煩瑣なのでここでは再掲はしないけれども，その表は「相対的剥奪」が準拠集団の性質の違いによって深く規定されていることの喚起または強調として、重要な意味をもっている。

一つだけ例をあげれば、「９つ目の抜粋」であった、「南部にいるニグロの兵士は自分を民間にいる南部のニグロと比べるから、彼らにとって軍隊生活のもつ心理的価値は、自分を民間にいる北部のニグロと比べる北部のニグロ兵士のばあいよりも、はるかに大きい」（Stouffer, 1949：564）というエピソードは、「内集団」で（なぜなら、共にニグロなので）、地位は低い（なぜなら、民間にいる南部のニグロは不遇の生活を余儀なくされているから）として分類されている。

もっとも、こうした分類には研究者にとってもある種の「自明性」と恣意性が伴うので、注意が必要であるように思われる。たとえば、自分が「南部に駐屯するニグロ」であるとして準拠枠に「民間にいる南部のニグロ」を選択したときに、自分にとって準拠枠は同じ「内集団」の人間であろうか、それとも「外集団」の人間であろうか。人種という観点をとればむろん「内集団」であるが、「民間か軍属か」という観点をとればむしろ「外集団」として処理しなければならないだろう。

この図表は今しがた述べた留保付きではあるけれども、むろん準拠集団概念の準備的整理としての役には立つ。マートンとキットは、これを手がかりとして更に「広範な特殊問題」(a wide range of specific problem)を取り上げるのである[3)]。

このあたりが「中範囲の理論」家の面目躍如と言うべきであろうか。いずれも *The American Soldier* のなかに報告されているエピソードを素材に取り上げて議論しているのである。全体としては長大論文であり、マートン単独では更に「準拠集団と社会構造の理論（つづき）」(Continuities in the Theory of Reference Group and Social Structure）という、これまた長大論文が『社会理論と社会構造』に収められているのである。

ここでは逐一紹介する必要もないと思うので、向後の「相対的剥奪」論の発展という観点から見たばあいの課題についてのみ簡単に触れておきたい。課題は二つあった、はずである。一つは、準拠集団の確認可能性の問題にかかわる。本来、ある人にとってのある問題をめぐっての準拠集団とは、外からは観察不可能な存在である。なるほど、マートンとキットは「相対的剥奪」が起ったのは「準拠集団」が介在していたからであるということを、エピソードを集めることによって例証してみせた。しかし、その「例証」の多くは *The American Soldier* における記述のなかから「＊＊と比べると」の部分を抜き出すことに依拠していたのである。たとえば、「…海外にいる兵士はまだ母国に残っている連中に比べると、家庭との紐帯を大きく絶たれるし、またこれまで親しんできた合衆国内での生活の楽しみも絶たれている…」（事例２より）といったふうに。

しかし、この「＊＊と比べると」の根拠は、更

3）リストにあげられている項目は、「準拠集団として作動する所属集団」「相互に葛藤する準拠集団と相互に支え合う準拠集団」「準拠集団論から由来する行動の斉一性」「社会構造の統計的指標」「準拠集団論と社会移動」「非所属集団に対する肯定的志向性がもつ機能」「これらの志向性を維持もしくは抑制する社会過程」「ある所属集団から別の所属集団への移行を規制する制度がもっている心理学的ならびに社会的機能」および「準拠集団論にとっての類縁概念のレビュー」であった。

に問い詰めるならば、インタビュー調査における聞き取りからの引証であるか、研究者の側からの推測にすぎない。さもなくば、それは「仮説」でしかないのである。何も「仮説」が悪いと言っているのではない。そうではなくて、もし「仮説」だとすれば、それをどうやって証明するかが次なる課題になる、ということを指摘しておきたいのである。準拠集団論の意義を「相対的剥奪」との関連で主張するのであれば、準拠集団の根拠はやはり「相対的剥奪」それ自体に関するデータのなかに求めなくてはならなかったはずである。しかし、マートンとキットはそうはしなかったのである。ここに、準拠集団という社会学理論からすれば有意義な概念と理論に到達しておきながら、相対的剥奪論からすればきわめて詰めの甘い議論に終始した理由がある。これが、準拠集団論に関するもう一つの「取り逃がした機会」である。

たしかに相対的剥奪論にとっては、準拠集団の存在は自明とはいえ、「観察不可能」であるがゆえに最後の難関となっている、と思う。簡単には、準拠集団によって相対的剥奪が左右されることを証明してみせることさえできないばかりか、ましてやどの集団が「準拠集団」となっているかをデータに基づいて示すことは至難の業なのである。マートンとキットは、準拠集団論の精緻化に邁進するあまり相対的剥奪論からすれば、準拠集団の観察可能性問題に立ち入る機会を、ひいては相対的剥奪を生成するメカニズム解明の機会を取り逃がしたと言わざるを得ないのである。

1.3　データの問題

マートンとキットは言う。「相対的剥奪の概念はもともと特定のデータを解釈するために案出されたのであるが、このデータとの結びつきから解放すれば、それは一般化されて、もっと広い一連の理論と結びつく。すなわち、相対的剥奪は準拠集団論の一特殊概念だと一応見なすことができるのである」（Merton and Kitt，1950：52）と。

彼らは準拠集団論を上位に位置づけていたがゆえに、相対的剥奪論の正当な発展を犠牲にしてしまったと言ったら言い過ぎであろうか。少なくとも、「特定のデータ」（the particular data）に固執するのではなく、自らをそれから「解放して」(free)してしまったのである。言い換えれば、「特定のデータ」から「解放する（＝自由にする）」ことで、データにもとづく相対的剥奪論の構築の機会を取り逃がしてしまったのである。

もっとも、マートンとキットにしてもみすみす機会を取り逃がしてしまったわけではない。あるところで彼らは言う。

> 「…常識からすれば、客観的な昇進率に著しい差があれば、おそらくそれに照応して、昇進機会の評定にもその差異が反映するものと考えられる。もしこのような照応関係が経験的に発見されていたなら、集団準拠枠の仮説を発展させる機縁はほとんどなかっただろうと思われる。…
>
> 今のばあいについていえば、*The American Soldier* のなかに収集されているような体系的な経験的データ（systematic empirical data）があったならこそ、例の変則的なパターンを見抜く（detect）ことができたのであって、印象だけに頼る観察ではとうていそれは見抜けなかったに違いない。」(Merton and Kitt，1950：54–55)

これはいわゆる事例 1 に関して述べた箇所である。しかし、ここで彼らが「体系的な経験的データ」と述べているのは、もともとスタウファーたちによって CHART IX とか CHART X とかの図表を指していたのである。しかるにそれらの CHART は、いずれも具体的な数値を書き込んだ棒グラフで示されており、スタウファーたちが言わば「それらの発見を文章化すればこのように表現できる」として述べたその文章表現の部分のみを取り上げて「体系的な経験的データ」として受け止めてしまったのである。当然、マートンとキットの論文だけを読んだ読者は、そうした文章記述こそが「体系的な経験的データ」だと受け止めたとしても不思議はない。

しかし、望むらくは数値の入ったオリジナルの図表をこそ、「経験的なデータ」として欲しかったという気持ちを禁じえない。なぜなら、「体系的」ではあるが、相対的剥奪論から見ればすでに旧稿において再グラフ化してみせたように「相対

的剥奪」概念の根幹に関わるデータが潜んでいたからである（髙坂、2009）。ここにマートンとキットが取り逃がしたもう一つの機会を見てとることができる。

2　ケンドールとラザーズフェルド

マートンとキットには「相対的剥奪」概念に注目するなかから、準拠集団論を展開していったという功績が認められるけれども、「相対的剥奪論」としては「中範囲の理論」としての弱点を露呈する結果となった。

この点、ラザーズフェルドたちははるかに方法論的にしっかりしていた。すでに前稿の末尾においても（髙坂、2010b）引き合いに出したように、統計学者であったケンドールとラザーズフェルドは *The American Soldier* のなかの尺度構成法やそれに関連する方法論的な基本問題について吟味した。彼らが明確にしようとした最大の点は、「個人的特性と集団的特性」の峻別と、峻別した上での関連性を問題にする点であった。その論点のモトになっているのは両者の対応をめぐる５つのタイプについての次表である。今となれば何気ない表に思えるけれども、やはり基本は基本として大切だ（Kendall and Lazarsfeld，1950）。

<u>個人データ（Personal Datum）の性質</u>
Ⅰ．一個人に付随する属性
Ⅱ．一個人に付随する変数
Ⅲ．タイプⅡに同じ
Ⅳ．個人を特徴づけるにあたっては、集団の他の成員か、集団全体のいずれかに準拠していることが必要
Ⅴ．単独の個人についての情報は用いられない

<u>対応する集団データ（Unit Datum）の性質</u>
Ⅰ．率（rate）
Ⅱ．平均（average）
Ⅲ．変数の分布に関わるパラメータ
（例、標準偏差、尖度を表す測度）
Ⅳ．前のタイプで用いられる統計的集計のいずれか
Ⅴ．集団のアイテムは集団のみを特徴づける。
ただし、前のタイプのデータを用いることによって意味のある文脈を有する

ケンドールとラザーズフェルドも、「最も興味のある事例」として私たちが一貫して取り上げてきた「昇進率と満足度」の関連性の事例（Stouffer，1949：250–258）を挙げている。前稿の末尾の注でも引用したとおり（髙坂、2010b：52）、「個人データを使えば昇進と満足は正の関係をもっているのが、集団データを使えば、満足は昇進機会と負の関係をもっている」点が「面白い」と言っているのだ。

そして、彼らの論文の末尾の「更なる問題」という結句的部分において、「社会学的視点からみて、最も面白い点」に言及している。

> 「集団データを集団内の諸個人を特徴づけるのに使えないはずはない。［たとえば］マラリアの発生率の低い集団内でマラリアに罹っていない個人は、同様にマラリアには罹っていないけれどもマラリア罹病率の高い集団に属している個人とはおそらく異なった感じ方をしていることだろう。」（Kendall and Lazarsfeld，1950）

彼らは「準拠集団」というタームを使ってはいないけれども、明らかにこれは準拠集団の問題と深く関わっている。「相対的剥奪論」の立場に立って振り返るとき、いくぶん悔やまれるのは、マートンとキットの力説した「準拠集団行動」とケンドールとラザーズフェルドが力説した方法論的厳密性とが、（コロンビア大学という同じ大学で相互啓発しあっていた関係であったにもかかわらず）交差し、新たな一歩をめざす統合につながらなかったという点である。私もすべての関連文献に目を通したわけではないものの、この望まれた統合は今日まで持ち越しになってしまったようである。

おわりに

The American Soldier の第１巻から第３巻が刊行されたのが1949年であり、第４巻が刊行されたのが1950年である。その解説版というか分析編というか、「『アメリカ軍兵士』のスコープと方法に関する研究」という副題をもつ書物（Merton and Lazarsfeld，1950）が刊行されたのが、やは

り同じ年の1950年であった。本稿で言及したマートンとキットの論文やケンドールとラザーズフェルドの論文もそこにすでに収録されていたのである。

マートンとラザーズフェルドは、*The American Soldier* というプロジェクト全体からすればコンサルタントという立場ではあったけれども、早くからオリジナルデータを共有し、実質的な共同研究者の一員であったことが窺える。

ラザーズフェルドがアメリカ世論調査協会の求めに応じて単独で執筆した「解説的レビュー」（Lazarsfeld, 1949）という比較的長い論文に至っては、*The American Soldier*（1, 2, 3巻）が刊行されたその年に雑誌に掲載されており、その間の緊密な研究ネットワークの存在を象徴していると言ってよいだろう。

真偽のほどは確かめたことはないけれども、時のコロンビア大学は（R. M.マッキーヴァーの後任のときの話だったか彼が学部長のときだったか忘れたが）甲乙つけがたく優秀なラザーズフェルドとマートンの二人を、一人の空き席を「二つに割って」正規の准教授として同時採用（するという英断を下）したと聞いたことがある。当時シカゴ大学に席を置いていたスタウファーを加えて彼ら3人が厚い友情と信頼と尊敬のもと、創造的知的相互啓発に浸っていた（いることができた）ことは、その昔私が直接聞いたR. ウィリアムズの講演（その席にラザーズフェルドも居た）でも十二分に窺うことができた。*The American Soldier* は、その証でもあり産物でもあったのである。コロンビア大学が、いわゆるコロンビア学派を超えて、アメリカの、そして世界の「経験社会学」と「理論社会学」の拠点を築くきっかけでもあったのである。

今しがた述べた経緯と評価は社会学史研究の一駒に譲るとして、最後に大急ぎで相対的剥奪論に立ち返ろう。マートンらもラザーズフェルドらも、*The American Soldier* というプロジェクトに対しては、「批判的コメント」や「解説レビュー」があるものの外側の人間ではなく、実質的には「内側の人間」だったと思われる。彼らの矢継ぎ早の一連の仕事以降、「相対的剥奪論」については（少なくとも社会学領域を中心に見るかぎり）しばらく途切れる印象があるのは一半にはそうした事情によるものであろう。「外側からの」発言は1959年から1962年にかけて、公刊される。Davis（1959）、Runciman（1961）、Davies（1962）がそれである。次に、それを見ていこう。

参考文献

Coleman, James S., 1990. *Foundations of Social Theory*. Cambridge: Harvard University Press.コールマン、J. S.（久慈利武監訳）『社会理論の基礎』（上、下）、2006年、青木書店.

Davies, 1962. 'Toward a Theory of Revolution,' American Sociological Review, Vol. 27, No. 1 (Feb.)：5–19.

Davis, James A., 1959. 'A Formal Interpretation of the Theory of Relative Deprivation,' *Sociometry*, Vol. 22, No. 4(Dec.)：280–296.

Kendall, Patricia L. and Paul F. Lazarsfeld, 1950. 'Problems of Survey Analysis,' in Merton, Robert K. and Paul F. Lazarsfeld (eds.) *Continuities in Social Research: Studies in the Scope and Method of "The American Soldier,"* Pp. 186–196. The Free Press.

髙坂健次，2006.「社会学における理論形成」『社会学評論』57（1）：25–40.

髙坂健次，2009.「相対的剥奪論　再訪（一）」『関西学院大学社会学部紀要』108号：121–132.

髙坂健次，2010a.「相対的剥奪論　再訪（二）」『関西学院大学社会学部紀要』109号：137–147.

髙坂健次，2010b.「相対的剥奪論　再訪（三）」『関西学院大学社会学部紀要』110号：47–54.

Lazarsfeld, Paul F. 1949. 'The American Soldier — An Expository Review,' *The Public Opinion Quarterly*, Vol. 13, No. 3 (Autumn)：377–404.

Merton, Robert K. and Alice S. Kitt, 1950. 'Contributions to the Theory of Reference Group Behavior,' in Merton, Robert K. and Paul F. Lazarsfeld (eds.) *Continuities in Social Research: Studies in the Scope and Method of "The American Soldier,"* Pp. 40–105. The Free Press.

Merton, Robert K. and Paul F. Lazarsfeld, 1950. *Continuities in Social Research: Studies in the Scope and Method of "The American Soldier"*. The Free Press.

Merton, Robert K., 1957. *Social Theory and Social Structure*, Revised and Enlarged Edition. The Free Press. マートン、（森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳）、1961.『社会理論と社会構造』東京：みすず書房.

Runciman, 1961. 'Problems of Research on Relative

Deprivation,' *Archives europennes de Sociologie*, II : 315−323.

Stouffer, S. A., E. A. Suchman, L. C. Devinney, S. A. Star, and R. M. Williams, 1949. *The American Soldier, Volume I: Adjustment During Army Life*. Princeton University Press.

The Theory of Relative Deprivation Revisited (4)

ABSTRACT

The present paper is the continuation of earlier articles by the author on the same topic. The present paper delineates how the notion of relative deprivation was examined and discussed by Merton and Kitt (1950) and Kendall and Lazarsfeld (1950) right after *The American Soldier* had been published in 1949. Merton and Kitt ingeniously emphasize that the notion of relative deprivation was inevitably intertwined with its correlative, the notion of reference group behavior, in particular. However, they missed the following opportunities: (1) they failed to define the concept of relative deprivation, just as Stouffer failed; (2) they failed to elucidate the underlying mechanism which might generate relative deprivation and its linkage to the reference group; (3) they failed to use and analyze the numerical data on relative deprivation in The American Soldier, focusing upon delineating descriptive summary of the data instead. Kendall and Lazarsfeld, on the other hand, pointed out the significance of the notion of relative deprivation from the viewpoint of methodological clarification of "level of complexity," but never went so far as to recapture the opportunities missed by Merton and Kitt.

Key Words: relative deprivation, *The American Soldier,* reference group, missed opportunity